

令和2年度 学校経営計画に対する自己評価【最終報告】

石川県立羽咋高等学校

重点目標		具体的取り組み	達成度判断基準	集計結果	分析(成果と課題及び次年度の取組)
1 確かな学力と進路実現の保障 探究型学習の推進など、授業改善を進め、全ての教育活動の中で生徒の主体性等を育み、生徒の進路実現へとつなげる。	①	授業改善を進め、生徒の思考力や表現力などの学力の向上を主体性をもって協働して学ぶ態度の育成を図る。	授業の内容は、生徒が主体的に活動する場面があり、思考力を高めることができる内容になっていると答えている生徒の割合が A 80%以上 B 75%以上 C 70%以上 D 70%未満	学校評価12月調査結果 ア:よくあてはまる 36.0% イ:ほぼあてはまる 58.6% ア+イ:94.6% A評価	前年比 +8.6% 前期比 +3.0% 前期は生徒の授業中の活動に制限があったが、後期には概ね例年どおりの生徒に授業中の活動をさせることができたと考えており、このため評価が高まったと考えている。 今後は、様々な教育改革に対応するために、一層、生徒がアクティブに思考し、活動する授業づくりに取り組んでいく。
	②	習熟度別授業等の改善を図り、個に応じたきめこまかな指導を充実する。 ・習熟度別授業の検証 ・学習意欲につながる授業改善 ・教科研究会等の充実 ・学力層に応じた指導方法の確立	習熟度別授業が学力向上に効果的であると答えている生徒の割合が90%以上の教科が A 3教科 B 2教科またはいずれも80%以上 C 1教科またはいずれも70%以上 D なし	学校評価12月調査結果 国語は3年文系、数学は2・3年、英語は全学年を対象に調査。 ア:とても効果がある イ:ある程度効果がある 国語 ア+イ:86.5% 数学 ア+イ:90.7% 英語 ア+イ:92.7% B評価	前年12月比 7月比 国語 データなし +2.0% 数学 +4.9% -0.3% 英語 +8.6% +1.8% 今年度から3年生も12月調査に協力してもらうこととしたので、3教科を対象とした調査が可能となった。いずれの教科も習熟度の指導を肯定的に受け止めている生徒が多く、授業改善の努力が成果につながっていると考えられる。今後も継続して授業改善に取り組んでいく。
	③	高い進路目標を達成させる。 ・授業・個人面談・進路学習等をととして進路意識の高揚を図る。 ・難関大学志望者に対する添削、補習指導など組織的指導を充実する。 ・習熟度別の補習や課題を工夫し、受験に対応した指導を行う。	ア:難関10大学・国公立医学科合格者5名以上 イ:金沢大学合格者20名以上 ウ:国公立大学合格者100名以上 以上のア～ウのうち達成した項目が A 3項目 B 2項目またはいずれも80%以上 C 1項目またはいずれも60%以上 D なし	令和2年度入試国公立大学合格者は ア:難関10大学・国公立医学部合格者 3名(東北大3) イ:金沢大学合格者 12名 ウ:国公立大学合格者 合計92名 である。 C評価	難関大は、昨年度は現役2人、過年度1人の計3人。今年度は現役のみ3人。3人で同じ目標を持つことでこの結果となったと考えられる。 金沢大学については、現役生が10人から9人。国公立合格者においては現役生76人から83人であった。共通テストの結果と出願校選択の指導がこの結果となった部分があると考えられる。 来年度は共通テストの影響が今年以上にあると考えられ、地力をつける方策を工夫したい。
	④	1・2年生全員の家庭学習時間が平日3時間以上、休日5時間以上となるように、個人面談、授業での予習指導、週課題等で指導する。	年間の平日家庭学習時間3時間以上達成者の割合が、 A 1・2年生ともに 65%以上 B 1・2年生ともに 50%以上 C 1・2年生ともに 35%以上 D 1・2年生ともに 20%以上	家庭学習時間調査結果 1月までの平均学習時間3時間以上の生徒の割合(前年比) 1年生 36.9%(+2.9%) 2年生 38.8%(-15.2%) C評価 平日の平均学習時間 1・2年生ともに2.7時間	1・2年生ともに考查期間中の学習時間は多いが、考查以外の期間では学習時間がまったく不足している。 担任面談や進路指導の行事をととして早期に進路目標を設定させ、授業の予習・復習や週課題に取り組む学習習慣を定着させるよう努めてきたが、成果が上がらなかった。 進路目標の実現には十分な学習の質と量の確保が必要であると自覚させる方策を検討しなければならない。
学校評価関係者委員会の評価		高校卒業後の進路目標を早い段階からなるべく高く持たせる取組をさらに充実させて、学校での授業はもちろん、家庭学習に取り組む学習意欲を高める工夫を盛り込んでほしい。			
評価結果を踏まえた今後の改善策		社会情勢の大幅な変化が進行するなかで、生徒の学習意欲を高めるために、日々の授業改善や進路意識を高める行事の改善につながるような見直しを継続的にを行いながら、それぞれの取組の効果の有無を見極め、改革を行っていく。			

重点目標		具体的取り組み	達成度判断基準	集計結果	分析(成果と課題及び次年度の取組)
2 基本的な生活習慣の確立と豊かな心の涵養 あいさつの励行から始まり、全ての教育活動の中で規範意識を高め、他者を思いやる心を持った、心身共に健康な生徒を育成する。	①	「あいさつの徹底」を通して規範意識を向上させ、自ら考え行動できる生徒を育成する。	第2回学校評価(生徒)で、「挨拶をしていますか」の間に、「ア:必ず挨拶する」「イ:だいたい挨拶をする」と答えた生徒ア+イの割合が A 100% B 95%以上 C 90%以上 D 90%未満	学校評価(生徒)12月調査 ア:必ず挨拶する 43.5% イ:だいたい挨拶をする 52.8% ア+イ:96.3% B評価	昨年同期は90.0%であったので、6.3ポイントを増加して、CからB評価となった。 昨年よりも評価が上がったことになるが、その実情は、むしろ積極的に挨拶できる生徒が減少している印象がある。 今後も、登下校時のみならず、授業の挨拶、校内で交わす挨拶に積極的に交わす取組を粘り強く継続していく。
	②	生徒間のネットトラブル等を未然に防止するための方策として、いじめに関する校内研修会やスマホ・ケータイ安全教室などを実施する。	研修等によって理解を深めた、いじめ問題やネットトラブル等の予防・対応策を常に心がけ、日常の生徒指導において実践している教員の割合が A 90%以上 B 80%以上 C 60%以上 D 60%未満	学校評価(教職員)12月調査 「いじめ問題やネットトラブル等の予防・対応策を、日常的に指導、実践している」の問いに ア:よくあてはまる 13.9% イ:おおむねあてはまる 77.8% ア+イ:91.7% A評価	7月調査では昨年度比4.3ポイント低下したが、今回調査では3.1ポイント上がってA評価となった。 日常的な指導実践がやや弱くなっていることが懸念されたが、結果はおおむね良好であった。 今後も、生徒の生活状況に気を配り、未然防止に重点を置いた生徒指導を実践していくようにする。
	③	文武両道の実践のため、学習時間の確保と部活動の時間・内容を充実させ、運動部は北信越大会以上、文化部は北陸大会以上を目指す。	北信越大会・北陸大会以上の大会に出場した部活動の数が A 12部以上 B 9部～11部 C 7部～8部 D 6部以下	男女陸上部～北信越新人 女子卓球部～北信越新人 男女剣道部～北信越新人 柔道部～全国選抜 弓道部～北信越新人 軽音部～全国総文、中部、北陸 少林寺拳法同好会～全国選抜 のべ9部 B評価	前期はほとんどの大会が中止となり、ようやく9月以降、公式大会が行われるようになった。北信越大会や全国総体が中止となり出場機会が減少し、評価が昨年のAからBに下がった。内容としては、卓球部女子や柔道部、軽音部の活躍など、特筆すべき活躍があった。 学校生活の充実に部活動が有益であるというアンケート結果もあることから、部活動の活性化に引き続き務める。
	④	基本的な生活習慣の確立の第一歩として、全ての生徒がバランスの良い食事を摂るよう指導する。	保健・相談課のアンケートでバランスの良い食事を心がけていると答えた生徒の割合が A 85%以上 B 80%以上 C 75%以上 D 75%未満	学校評価(生徒)12月調査 ア:常に心掛けている 38.9% イ:時々心掛けている 46.8% ア+イ:85.7% A評価	7月調査では昨年比9.1ポイント上昇、12月調査でも昨年比6.3ポイント上昇し、CからA評価に2ランク上がった。 本校生徒は、食事の栄養バランスに気を使っていることがわかる。また、97.1%の生徒が3食きちんと食事を摂っている。
	⑤	部の顧問に協力を得て部活動単位で校内外を問わず、積極的にボランティア活動をする。	ボランティア活動を複数回実施した部が A 100% B 95%以上 C 90%以上 D 90%未満	ボランティア報告を2回以上提出したのは25の部・同好会のうち9部、36%であった。(8部が1回提出) D評価	今年度、ボランティア活動の機会を増やしたにもかかわらず結果に結びつかなかったのは、ボランティア精神が欠如している生徒が増えているのではないかと懸念される。今後、より一層、身近なところである部活動単位でのボランティアを意識付けすることに努めたい。

		⑥『図書だより』、『図書館報』、読書啓発企画をとおり、新着図書の紹介や読書の楽しみを啓発し、読書習慣を身につけさせる。	生徒一人当たりの貸出数が A 4冊以上 B 3冊 C 2冊 D 2冊未満	4～8月 950冊 9～1月 762冊 2～3月 413冊 年平均 3.9冊	B評価	一人当たりの平均は3.9冊で昨年比プラス0.7冊となった。この結果は4・5月の休校により、開館日数が16日少なかったことや放課後の開館時間を1時間短縮したこと、生徒数が1クラス分減少したことなどのマイナス要因があったが、大幅に増加したと考えられる。 「図書館だより」や「図書館報」、ブックレビューなどの広報活動や情報提供に努めたこと、探究学習や進路学習での図書館利用を促すイベントを実施するなど、読書推進の取組が功を奏したと考えられるので、引き続き、各取組に努めていきたい。
		⑦体育の授業で体づくり運動やチーム練習を主体的に取り組ませ、体力の向上を図る。	スポーツテストの結果で全国平均を上回った種目が8種目中 A 6種目以上 B 5種目 C 4種目 D 3種目以下	※スポーツテストは中止		
学校評価関係者委員会の評価	生徒の高校生活の充実感、教育目標としている「文武両道」の実践が効果的だと考えられることから、学校行事や部活動の充実にも力を注いでほしい。					
評価結果を踏まえた今後の改善策	学校行事や部活動を制限せざるを得ない状況ではあるが、生徒が自主的に工夫して前向きに取り組む姿勢を醸成しながら、可能な限り実施していく。					

重点目標		具体的取り組み	達成度判断基準	集計結果	分析(成果と課題及び次年度の取組)
3	地域から信頼される学校づくり 「未来塾」やボランティア活動をとおり、医療や教育の分野を中心に地域に貢献できる人材を育成することで、地域から信頼される学校づくりに努める。	①授業公開やオープンスクールを実施することで、中学生・保護者に本校を理解してもらえるように努める。	体験入学参加者によるアンケート調査で満足度が80%を A 大きく上回った。 B 上回った。 C 下回った。 D 大きく下回った。	※体験入学は中止	
		②出前授業、学校説明会、羽咋高校だより、地区別高校説明会、未来塾のPR等の実施に関して、内容・方法に工夫改善を加え、今まで以上に、地域住民、中学生や保護者に本校を理解してもらえるよう努める。	一般志願倍率が1.1倍に対して A 上回った。 B 同程度であった。 C 下回った。 D 大きく下回った	今年度の志願倍率は0.9倍 C評価	授業改善をはじめとする教育内容の充実を推進するとともに、学校行事や部活動の充実を図ることでニーズに応える学校づくりに努めているところである。本年度は出前授業や羽咋高校だより作成は実施できなかったが、ホームページの全面的刷新、中学生向けの広報動画の作成、各中学校が開催する説明会への参加、地区別説明会開催など、広報活動にも力を注いだ。地区説明会への参加者が増加したことから本校への関心は引き続き高いものと考えられる。しかし、志願者数が昨年より減少したことを受けて、その要因を分析し、いっそうの本校の魅力増進に努めて、志願者数の増加を図りたい。

		③	保護者や外部に向けて月別毎の行事予定表や実施した行事・部活動報告など、最新の情報をこまめに迅速に提供することに努め、本校の教育活動への関心・理解を深める。	保護者アンケートにおいて本校のホームページが「役立つ」「やや役立つ」と答えた保護者の割合の合計が A 70%以上 B 65%以上 C 60%以上 D 60%未満	学校評価アンケート結果(保護者)において ア:大変役に立った 35.5% イ:やや役に立った 52.0% ア+イ:87.5% A評価	前期比-0.1ポイント、昨年同期比で+23.7ポイントと大幅に増加した。今年度の特殊事情が反映されていると考えられる。また、機動的な情報発信を目指し、ホームページを刷新したことも功を奏したと考えられる。 インターネットを活用した情報発信の重要性は今後ますます高まるので、保護者のみならず、地域への情報発信にも注力したい。
学校評価関係者委員会の評価			ウェブサイトの刷新に取り組み、情報の発信に努めていることは一定の評価ができるが、地元の行政との連携や新聞社への情報提供が弱いと、地域に根差した学校という地域への意識づけを強くするように取り組んでほしい。			
評価結果を踏まえた今後の改善策			地域の高校のなかで、本校独自の特色として打ち出すことができる「未来塾」の取組内容充実と情報発信に注力しながら、生徒一人ひとりの進路実現をしっかりと支援する。			

重点目標	具体的取り組み	達成度判断基準	集計結果	分析(成果と課題及び次年度の取組)
4 教職員の多忙化改善 働き方に対する意識改革と時間外勤務の縮減を目指す。	① 平日は、19:30までに退校するために、1日の業務計画を立てる。部活動に関して年間計画、月別計画、実施表を作成して、適切な休養日を確保できるようにする。 業務改善にも工夫をする。	教員の時間外勤務時間調査において、月平均の時間外勤務時間が A 40時間以下 B 40～45時間以下 C 45～50時間以下 D 50時間超	勤務時間調査において、1人当たり月平均の時間外勤務時間は 平均 31.2時間 A評価	本年度は、4・5月に臨時休業となったために時間外勤務時間が大きく減少した。さらに、部活動の対外的な活動が大幅に縮小されたことや各職員の働き方の見直し意識が高まったことで、時間外勤務時間の縮減につながり、例年に比べて大幅に下がった。また、6月以降についても、種々の活動が中止になったり、抑制されたりしていることから、勤務時間が減少した。 今年度の対応がスタンダードにはならないものと考えているが、今年度の経験を踏まえ、前年度踏襲を改めて、業務の見直しを進めたい。
学校評価関係者委員会の評価	生徒に対する指導機会を優先すると、なかなか教員の業務効率化は難しいことは理解できるが、むしろ生徒の教育の充実のために、少しずつでも教員の労働時間の短縮に努めていただきたい。			
評価結果を踏まえた今後の改善策	教育現場が教員の情熱に支えられている現実をしっかりと分析し、教育効果を低下させずに、教員の業務の効率化を図る工夫と努力を進めていく。			